
海辺のテトラポット

小末

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海辺のテトラポット

【Nコード】

N1613T

【作者名】

小末

【あらすじ】

主人公修一は毎年お盆の時期に、母の実家に帰省する。田舎に友達も従兄弟もない修一は、退屈を紛らわせるために自転車であたりを探索して回っていた。そんなある日、修一は旧道の奥にある寂れたトンネルを発見する。そのトンネルの向こうで、修一は一人の少女に出会った。

一日目(1)

たちこぎ、たちこぎ。

俺は今、猛烈に自転車のペダルを漕いでいた。

サドルから腰を浮かせて、立ったままで、頭の上でさんと輝く太陽に急ぎ立てられながら。

遠くの方にぼつと見える、くすんだ青色の屋根を見据えてただひたすらに足を動かす。

自転車のかごにはカップアイスが三つある。ちらつとかごの中に目をやって確認すると、俺に劣らず大量に汗をかいていた。これはまずい、非常にまずい。

俺は姿勢を前に傾け、さらなる加速を試みる。

「空気抵抗だ、空気抵抗を減らせ」

心なしか横をすり抜ける風が早くなった気がするが、多分本当にそんな気がするだけだ。

その証拠に右ハンドルの速度計の針はさっきとほとんど変わっていない。

「駄目だ、考えるな、走れ」

そうだ、走らなくては。

俺は今急がなくちゃいけない。

走れ、走れ、走れ。

意気込んだ矢先、タイヤで小石でも踏んだのか自転車が縦に揺れた。大した衝撃ではなかったが、かごの中でアイスたちが大きく跳ねる。

かこの底に無情にも叩きつけられるアイスたちを視界の端に捉えて、反射的にかこの中を見た。そして俺は、アイスの中の容器の一つが派手に凹んでいるのを目にしてみう。あんな凹み方は、中が液状かそれに近い状態でない限りありえない。

足から自然と力が抜ける。俺の腰はサドルに着地し、膝はやがて自転車漕ぐ事をやめた。

すると、流れて行った景色が止まり、それからゆるゆると自転車の車輪が停止した。ブレーキをかけた時の、なんともいえない音を聞いた後、俺はサドルにまたがったまま頂垂れ、一息ついてから自転車を降りた。

諦めきれずに、汗だくで凹んだ俺のチョコミントを手取る。すると、驚いたことに全く冷たくなかった。ぬるい。

アイスがこうなってしまった以上、俺に急ぐ理由はなかった。

俺は自転車を押して、帰ることにする。

じいちゃんの家はもう目と鼻の先だ。

海辺のテトラポット

「あつはつはつは、ほれ、修一なんだこれは！」

じいちゃんはアイスの入ったコンビニの袋を掲げながら、カラカラと笑った。上機嫌そうなじいちゃんの後ろには、こちらを困った顔でうかがいながら洗濯物を畳むばあちゃんがいる俺といえば、今の隅っこの扇風機の前を陣取ってふてくされていた。我ながらなんて情けないんだろう。

俺は今朝、じいちゃんとちょっとした賭けをしていた。ここから一番近いコンビニまで自転車で行って、アイスを溶かさずに持って帰ってくれば俺の勝ち、アイスが溶けたらじいちゃんの勝ち。負けた方がアイスの代金を支払うと、そういう賭けだ。結果はご覧の通り、アイスはこの炎天下の元無残にも溶け、冷たさのかけらも感じられない姿になってしまった。

「ほれ、修一！財布だ財布！」

「まあ、お父さん。修ちゃんもほら、こんなに汗まみれになって頑張ったんですから、アイス代くらい許してあげればいいじゃないですか」

「母さん、これはそういう問題じゃないぞ。これは男同士の約束なんだ！」

「それにしたって、ねえ」

「いいよ、ばあちゃん。じいちゃんの言うとおり約束したし。」

じいちゃん、財布」

ばあちゃんが俺をかばってくれたが、ここで約束を果たさないとすると更に情けないので、嫌々ながら中身の少ない財布をじいちゃんに放った。じいちゃんは危なげなく俺の財布をキャッチする。

「なんだ、修一。小銭ばかりじゃねえか」

「夏休みだから、色々遊びに行ったりしたんだよ」

「ふうん、いいじゃねえか。うらやましいねえ。」

ほいじゃ、貸した500円返してもらうからな」

「……わかったよ」

じいちゃんは喜々として俺の財布から金色に輝く500円玉を抜き取り、さっき俺がやったみたいに、財布を俺の方に投げた。

「修一、毎度！」

じいちゃんは俺が財布を受け取ったのをみて、真っ白い歯をむき出しにしてにいつと笑った後、いつもみたいにカラカラ笑いながら外へ出て行った。

「おじいちゃんったら、もう。修ちゃん、ごめんね」

「いいから」

ばあちゃんは俺に気遣わしげに声をかける。そんなばあちゃんを何故かうつとうしく感じて、思った以上にそっけなく返してしまう。ばあちゃんは何にも悪くないのに、完全に八つ当たりだ。しかも、そんな八つ当たりしてしまう自分が嫌で、さらにイライラしてしまう。駄目だ。

「シャワー浴びてくる。気持ち悪い」

「そう。じゃあこれ持って行きなさい」

ばあちゃんは俺に洗濯したてのタオルを渡して、にこりと微笑む。

俺はそれに頷いて応えて、まっすぐ風呂場へ向かった。

八月中旬、つまりはお盆の季節に、俺と母さんは毎年、じいちゃんの家に戻りに行く。

じいちゃんの家は畑とたんぼに囲まれた、本当になんにもないところにある。隣の家まで5キロは離れているし、スーパーやコンビニはそれよりずっと遠いところしかない。同じくらいの年の従兄弟が居るわけでもないし、正直少し退屈な場所だ。嫌いな訳じゃないけど、もう少し何かあればな、と毎年思う。

例えば、近くに同じくらいの年の友達がいたらいいのに。

風呂からあがって、水でも飲もうかと台所にいくと、母さんが大きな鍋にお湯を沸かしてした。今日の昼はそうめんか冷やしラーメンになりそうだ。

「あら修一、帰ってたの？」

「うん」

「おかえり、それで、おじいちゃんとの賭けはどうなったの？」

嫌なことを聞かれた。

「負けたよ」

「やつぱり。だって佐々木さんのコンビニまで自転車で30分はかかるでしょ」

「……でも、出来ると思ってたんだよ」

「まあね、ここくるとあんたはいつも自転車漕いでるもんね。自信もつくでしょうよ。自転車乗れるようになってから、から中学二年になった今まで、毎年毎年ずつとだものね、ここに帰ってくるって。あとしいちゃんが自転車乗って時間つぶすくらいなら俺の仕事手伝えって」

母さんはテキパキと昼飯の準備をしながらぺらぺらしゃべる。ねぎを刻んで、しょうがを磨って、ということは今日はそうめんだな。

「だって他にやることねーんだもん。仕事手伝うのはしんどいやだ」

「ま、確かにじいちゃんの手伝いはしんどいわね」

「それにさ、昨日面白そうなところ見つけたんだ」

「面白そうなところ？」

「そう、面白そうなところ」

俺は昨日もほぼ一日中、今日の午前中のような全力疾走でないにして、自転車をこいでいた。このだだっ広い田舎の隅から隅までまわってやるつもりで、地図を見ながらあっちこっちぶらぶらとやっていたのだ。

「ここから墓地まで行く途中脇道をずつと行つたところに、なんか舗装がぼろぼろの道あるだろ。海が遠くに見える道路。あの先にトンネル見つけたんだ」

「ああ、旧道のこと？危ないんじゃないの」

「大丈夫だよ、多分。何の注意書きもなかったし。今日昼食べ終わつたら行つてみようと思つて」

「そう、まあ、怪我だけはしないようにね。……さ、出来た。あとはそうめんゆであがるのを待つだけね。修一、食器の準備してから、じいちゃんとはあちゃん呼んできて」

「わかった」

母さんの手元を見ると、きちんと薬味が小鉢に入れられて並んでいた。ネギ、しそ、ワサビ、揚げ玉にショウガ。

しかもいつの間にか大きな鍋の中では、真っ白な素麺が踊っている。俺はそれらを見て、自分が大層空腹なことを自覚する。そりやそうだ、だってついさっきまで一時間近く自転車を漕いでいたんだから。俺は急いで食卓に食器を並べ、走ってじいちゃんとはあちゃんを呼びに行った。早く昼飯を食べて、昼飯が終わつたらあのトンネルを探索するんだってそんなことを考えながら。

一日目(2)

昨日の記憶を頼りに墓地の手前の脇道を進むと、やはりそこには舗装の剥がれかけた道があった。記憶の通り、遠くに海が見える。あの後母さんに詳しく話を聞いたところ、もっと便利な場所に新しい道路が出来たから使われなくなってしまった道らしい。

俺はその奥のトンネルを目指して、ぐいぐい進んでいく。道が悪いのでいちいち自転車がガタガタ揺れたけど、気せず進む。

しばらく行くと、立派なトンネルが姿を現した。全体的に埃まみれではあるが、劣化している様子はない。自転車から降りて中をのぞくと、トンネルの中のアスファルトはいままで来た旧道に比べて、はるかに舗装がきちんとしているようだった。

「よしっ」

自分自身に気合を入れて、俺は自転車を再び漕ぎだした。若干の期待と緊張を抱いて、トンネルの中に入っていく。トンネルの中は思ったより暗くて、そして長かった。ライトを点けてもせいぜい三歩くらい先までが照らされるくらいで、ちつとも明るくならない。多分トンネル自体がカーブしているので、自然光がうまく入らないんだろう。

「平常心、平常心だ」

そう言い聞かせながら、俺は黙々と自転車を漕ぐ。不思議になめらかな道を、どんどん漕いで行く。前も後ろも横もすべて黒く塗りつぶされたように真っ暗な空間を、自転車のライトだけを頼りにしてただただ進む。いくらかすると、やっと小さく出口が見えてくる。内心で大きくガッツポーズをとり、俺は張り切って立ち漕ぎを始めた。スピードがぐいぐい上がり、小さかった出口はどんどん大きくなってくる。そして俺は、やっとトンネルの向こう側に出たのだった。

「海だ……」

トンネルを抜けた俺を迎えたのは、かなり近くなった海と、穏やかな潮騒だった。トンネルに入る前はあるなに遠かったと思ったのに、今はもう、道路脇のガードレールを越えれば、すぐそこに海岸が広がっていた。

俺はひとまず、自転車を道路の隅に止めて、浜辺まで行ってみることにする。

浜辺の砂は内地の砂浜にしては白くて、そして綺麗だった。ゴミなんか少しも落ちていない。掃除好きのおばさんでもこの辺に住んでいるのだろうか。

手近にあった平たい石をつかんで、海へ投げた。石は三回ほど海面を跳ねて、そして沈んでいった。それを見届けた後、俺はまた石を海へ投げた。今度は五回跳ねた。もっと平たくてよく跳ねそうな石を探そうとあたりを見回すと、遠くの方に人がいるのが見える。何をしているか良く分からないが、じっと佇んで海の方を見つめているようだった。

俺はせっかくだから声をかけてみようと思ひ立ち、その人の方へ駆け寄る。近づいてみると、どうやらその人影は俺と同じくらいの女の子だったらしい。白いワンピースに、揃いのつばの広い帽子をかぶっている。そのまま近づいていくと、あっちもこちらに気づいたらしく、少女は俺の方を向いた。

目があったので、なんとなく手を振ると、少女は立ちあがってこちらに駆け寄ってきた。互いの距離が一気に縮まる。

「君、だれ？」

近づいてくるなり、その少女はいきなりそう言った。

俺は突然の事でしばし言葉に詰まったが、じっと見つめてくる少女の黒い瞳に急かされて、とりあえず名前を名乗った。

「修一……だけど」

「私は風子」

風子、と少女は名乗った。遠くから見たときは俺と同じくらいかと思っただが、顔立ちがクラス的女子より幼いので、もしかしたら俺より少し年下なのかもしれない。

「ここら辺の人？」

俺は風子にそう聞いた。風子は一つ頷いてから答える。

「うん、この近くの町に住んでる」

「親とかの帰省で帰ってきてるわけじゃないんだ」

「ちがうよ、君はそうなの？もしかして、あのトンネルの向こうから来た、とか？」

「まあ、うん」

俺がそう言っていると、風子は大きな目を更に大きく開いて、えっと小さく漏らした。そんなに驚くような事を言っただろうか。

不思議に思う俺を、風子は少し疑った風にこう聞いた。

「……本当に、トンネルの向こうから来たの？嘘じゃない？」

「嘘じゃないけど、なんで？」

「えっと……だってこの町に帰省する人なんていないもん。帰省しに行く人ばかり」

「えっ、こんなに田舎なのに？」

そう言っていると、風子はむっとした顔つきになる。そりゃそうか、自分の住んでるところを田舎と言われていい気分になる奴なんかいないだろう。

「まあ、確かに田舎かもしれないけど……とにかく帰省する人がいっぱいいるの。友達も近所の人もみんな帰省しちゃって、今町には全然人がいないの。だからすっごい暇！」

田舎にもそんな町があるのかと少し感心する。そう言えば俺の住んでる団地も、お盆の時期にはガラガラになる。

友達だってなんだかんだで田舎に帰ったり、旅行行ったりする奴が一杯いるし。田舎に帰ると暇だからって毎年ゴネるけど、家の方に

残ったに残ったでいいじゃんとはあちゃんが居ない分、暇なのかもしれない。

なんて、目の前の不満そうな顔を見て思った。

「ねえ、だから、私と遊んで！」

そんなことを言いながら、急に凧子が詰め寄ってきた。肩をひつつかまれて、がくがくとゆすられる。

「な、なんだよ急に」

「だから、私と遊んでって言うてるの！どうせそっちだって暇なんでしょ！」

その勢いに少し戸惑ったが、断る理由が特に思いつかないので、俺はとりあえず頷いた。

すると凧子の顔が一気に明るくなる。

「よし、決まり！ 決まりだからね！」

「わ、わかった」

凧子は俺の手を握って、ぶんぶん振り回してはしゃいでいる。よっぽど暇だったんだろうな、女の子だから俺みたいに自転車漕いでぶらぶらなんて事もしないだろうし。

凧子の白い肌は、彼女の夏休みがいかに退屈なものか代弁しているようだった。

「じゃあ、あのね。修一って呼んでいい？」

「なんだよ、いきなり」

いきなり名前を呼び捨てにされる。年下の奴にいきなり呼び捨てにされるのは、あまりいい気がしなかった。

「名前の呼び方くらいはつきりさせておきたいじゃない？ね、修一って呼んでいいよね？」

けれど、呼び捨てにするな、なんていつて凧子の上機嫌に水を差すのも悪い気がして、俺はそれを許すことにした。

「別にいいけど……」

「よかった！じゃあ修一も私の事、凧子って呼んでね」

握った手にぎゅっと力を入れて、凧子はそう言った。俺はその手の

予想外の力強さに、少しだけびつくりする。

「えっ、ああ、うん」

「そうと決まったら、さっそくこの町を案内してあげる！さ、行くう！」

そう言うときさま尻子は俺をぐいぐいと町の方へひっぱりだした。仕方ないので、引つ張られるままに何歩か歩いた後、俺は唐突に置いてきた自転車の事を思い出す。

さすがに道路わきに置いたまま遊ぶのはまずいだろう。万が一自転車がなくなりでもしたら、何時間も歩くはめになってしまう。そんなのはごめんだ。

「ちょ、ちよつと待って。俺、自転車で来てるから、遊ぶ前に自転車どっかに置きたいんだけど……」

「あーうー、うーんと、それじゃあとりあえず私の家の前に止めておきなよ。どうせ最初は私の家に行こうと思ってたし。お中元に貰ったおいしいカステラ、麦茶と一緒に出してあげる」

麦茶とカステラ。

その単語を聞いた後、瞬時に俺の頭の中は厚く切られた黄色いカステラと、涼しげな硝子のコップに注がれた麦茶で満たされた。そう言えばそろそろおやつの時間だったかもしれない。

「わかった、そうする。じゃあ、自転車持ってくるから」

「あ、待って。私も行く」

俺が自転車の方へ向かおうとすると、すかさず尻子は俺についてくる。会ったばかりなのに、どうして尻子はこんなに俺にかまうのだろうか。少し疑問に思ったが、別に悪い気はしなかった。

一日目(3)

と凧子は自転車を押しながら、凧子の町を歩いていた。この地方にしては珍しく住宅地と呼べるくらいに密集して家が建っていたけれど、凧子の言っていた通り町はほとんど無人だった。たまにお年寄りとすれ違うのだが、家の数の割には不自然なほどに人の気配が感じられない。

「ね、人全然いないでしょ」

凧子は何故か少しだけ得意げだった。俺は凧子の言葉に対して、素直な感想を口にする。

「本当にいないな」

「つまんなそうでしょ、私かわいそうでしょ」

「確かに、暇そうだよな」

同意を得られたのが嬉しかったのか、凧子は「だよねっ」と語気を弾ませた。

「あ！そういえばさ、修一はどの辺に住んでるの？」

「じいちゃんの家はトンネルくぐって自転車で30分くらいのところ。普段住んでる家はこつから車で3時間半くらいいったところ」

「へー、ずいぶん遠くから来てるんだ。二つの意味で」

「まあね」

凧子は俺を先導するように、少し前を歩いていたのだが、ある家の前で唐突に足をとめた。そして、俺の方を振り返ってにっこり笑う。

「修一、ここが私の家」

見ると茶色いタイルの外壁の、趣味のいい一軒家があった。そこそこの広さの庭もあって、花壇にはたくさんのひまわりの花が咲いている。

「ほら、早く入って！」

「えっ、ちょっと待てよ」

そう言うと、風子はさつさと家の中に入ってしまった。俺は慌てて庭先に自転車を止め、その後を追いかけた。玄関のドアに手をかけて、思い切り引くと軒先に吊るされていた風鈴が涼しげに鳴る。

「おい、勝手に入るぞ」

「どうぞー。まっすぐ行ったら居間だから、座ってて！」

奥の方から風子がそう言うので、俺はサンダルを脱いで言われたとおり廊下を真っ直ぐ歩く。素足で歩く廊下はひんやりとしていて、気持ち良かったが、俺は妙な居心地の悪さを感じていた。

冷静に考えれば、今日会ったばかりの女の子の家にさっそく上がりこんでいるという状況なのだ、今は。ただ、風子はおそらく俺より年下で、ということは小学生くらいなんだろう。

小学生だったらいきなり自分の家に新しい友達を呼んだって不思議ではないと思うし、そもそも小学生相手にそんなに意識をしなくてもいいような気がする。というか、そうだ。意識する必要なんてない。

俺はただ、暇つぶしの為に年下の奴と遊んでいるだけなんだから。

そんなことを悶々と考えていたら、いつの間にか居間らしきところについていた。テレビと、その向かいにテーブルと椅子がある。そこには風子はまだ居らず、その代わりに別の人間が居た。

俺よりいくらか年上の男だ。浅黒く焼けた肌に、真っ白なワイシャツがなんだか眩しい。

「お前、誰だ？ 見ない顔だな」

男は、いきなり俺にそう問いかけてきた。この町の人間は、他所の者の顔を見たら名乗らないままに名前を聞くようにしつけられているのだろうか。いずれにしろ家の人に挨拶しないわけにもいかない。俺はそれに答えた。

「野田修一です」

「トンネルの向こうから来たのか」

こっちが名乗ったにも関わらず、名乗り返さないのに腹が立つ。きつと年下だからって舐めてるんだ、俺の事。

「はい」

「なるほどな」

そいつは、そこで自己紹介もせずに本当に黙ってしまった。俺はむっとして、ぶっきらぼうにそいつに訪ねる。

「そっちの名前は？」

「信彦。風子の両親が居ない間、面倒見てる」

「へえ、そうなんですか」

「ああ」

俺が口を閉じると、相手も口を閉じる。しばし気まずい沈黙が流れる。たぶん信彦は気まずいなんて思っていないのだろうけど。開き直って蝉の声に耳を澄ませていると、信彦が再び不意に質問してきた。

「歳はいくつだ」

「14、ですけど」

「俺は18」

「そうなんですか」

「ああ」

信彦の答えがそっけなさすぎて、会話が続かない。自分から話しかけて来たくせに、どうだろう、この有様は。そもそも、普通面倒見てる子の友達が来たらもう少し愛想よくするものじゃないのか。

気まずさからどこを見るでもなく何となく視線を迷わせていると、不意に信彦が手を差し出した。手のひらの上には何か、茶色くて四角い、小さな固まりが一つ乗っかっていた。

「キャラメル、ですか？」

「ああ、食べ」

「え？」

食べ、と言われて改めて信彦の手の上のキャラメルを見る。そして、

信彦の顔を見る。すると、無表情で俺の顔を見ていたらしい信彦と真正面から目があった。

「どうしてですか」

「いいから、今すぐ食べ」

俺が質問すると、信彦は少しいらついた様子で更にキャラメルを勧めてきた。どうやら質問に答える気は無いらしい。正直ムカついたが、ここでこの申し出を断つても子供っぽいかと思ったので、ここは素直に受け取ってやることにする。

「それじゃあ、いただきます」

信彦の手からキャラメルを取り上げ、すぐさま口の中に放り込んだ。奥歯でぐにやぐにやに噛んで、小さくして、あつという間に飲みこむ。信彦は俺のその様子を見て、少しだけ口元を緩めたような気がした。

「食べましたけど」

「ああ、それでいい」

信彦がそう言ったのとほぼ同時に、凧子がお盆にカステラと麦茶を載せて現れた。

「信ちゃん！なんでここにいるの?!」

凧子は居間に入ってくるなりそう言った。驚いた様子の凧子に対して、信彦は相変わらずの仏頂面で答える。

「心配になって帰ってきた」

「心配になってって……もう、私も子供じゃないんだから、ひとりでも大丈夫だよ」

「そうか」

そう言うと、信彦は俺と凧子をそれぞれ一瞥してから、何も言わずに居間を出て行った。凧子は信彦の背中をしっかりと見送ってから、俺の方を振り返る。その表情はいかにも不機嫌そうだ。

「修一、信ちゃんさ、いつ来たの?」

「俺が入ってきた時には今に居ただけ」

「ふーん……あ、修一。どうぞ座って」

俺は促されるままに、一番近くにあった椅子に腰かける。凧子もカステラの乗ったトレーをテーブルの端に置いてから、俺の真向いに座った。

「いや、なんか悪いな。急に押しかけた上に色々出してもらって」

「ぜんぜんだよ。そもそも、私が誘ったんでしょ」

「そうだけどさ、なんか、わかるだろ」

「まー、確かに出してもらう側だったらそう思うかも」

凧子はテーブルにカステラと麦茶を並べる。カステラはきちんと厚く切られていて、麦茶のコップにはたくさん氷が入っている。うん、なかなかどうして感心なことだ。

凧子はカステラと麦茶を観察する俺がおかしかったのか、くすりと笑った。

「おなか空いてるんでしょ、どうぞ」

「いただきます!」

俺はさっそくカステラを口に運ぶ。程良い甘さが単純においしい。次に麦茶に手をつけるが、こちらも乾いた喉をしつかりうるおしてくれた。俺はしばらく夢中でカステラと麦茶を楽しんだ。凧子と言えば、自分の分を食べることもそこそこに、俺を見て機嫌がよさそうに微笑んでいのだった。

「どう、おいしい?」

「めちゃくちゃうまい」

カステラを頬張ったまま答えると、凧子はほっとしたようにひと息をついた。

「それならよかった!」

「昼から何も食べてなかったからなおさら」

昼ご飯を食べてからたぶん三時間強、俺は自転車をこぎ続けたわけだから当然腹が減っている。しかも中途半端な減り方じゃない、胃袋が空っぽという表現も生ぬるいくらいに、俺のおなかへぺこぺこ

だった。

そんな時に食べるものならなんだって美味しい。まあ、それを抜きにしたってこのカステラと麦茶は美味しいものだと思うけれど。そういう主旨のことを風子にいうと、一言余計だといって怒られてしまった。

「そういえば、さっき信ちゃんと何話してたの？」

「いや、話してたって言うか、俺が色々聞いてただけっていうか」

「ふーん……何聞いたの？」

「えーっと、年とかなんで風子の家にいるのかとか……あと」

なんかいきなりキャラメル貰ったから、その理由とか。そう続けようとしたのだが、俺はそこで口をつぐんだ。きっと俺だけキャラメル貰ったなんて聞いたら、風子は更に拗ねるに違いない。だから、このことは言わない方がいいだろう。

「あと？」

「特になし」

風子は探るように俺の顔をじっと見つめる。俺はなるべく平静と無表情を心がけて、その視線を受け止める。

「……ほんと？」

「本当」

「それならよかった！」

風子の質問に俺が即答すると、風子は唐突ににっこりと笑った。突然変わった表情にびっくりして、胸のあたりが少しだけどきどきする。

「あ、そうだ！このあとなんだけど、駄菓子屋さん行かない？」

「駄菓子屋？なんで？今食べたばかりじゃん」

「いーじゃん、珍しいでしょ。今時駄菓子屋さんなんて。修一、見たことないんじゃないの？」

「まあ、確かに」

「じゃあ決まり！私、自分の自転車外に出してくるね。カステラの

残りは修一にあげるから、全部食べたなら外に出てきてね」

矢継ぎ早にそう言つと、凧子はさつさと外に出て行つてしまった。

凧子の皿を見ると、カステラがほとんど残っていた。凧子はカステラが嫌いなんだろうか、だからカステラを残して駄菓子屋に行こうというのだろうか。

俺は自分の皿のカステラをさつさと食べ終わり、さつそく凧子の分のカステラに手を伸ばす。凧子のカステラもあつという間に食べ終わってしまった俺は、一応飽いた食器を下げてから、急いで居間を出た。玄関に行くと、そこには俺の自転車と、たぶん凧子のものだろう銀色のフレームの小さなママチャリがあつた。

「ほらほら、早く乗って！」

凧子に背中を押されたので、俺はさつさと自転車に乗る。そして凧子も、こなれた様子でママチャリにまたがった。

「それじゃあ今から駄菓子屋さんに行くから、着いてきて」

「わかった」

「私の自転車漕ぐの早いから、気合入れてね！」

俺の自転車がママチャリに負けるわけないだろ。そう反論しようとしたときには、もう凧子のママチャリは数十メートル先まで行つていた。早いというのは本当らしい。

俺は遅れを取り戻すためにサドルから腰を浮かせて、凧子を追つた

一日目（４）

凧子の家から自転車で２０分ほど行ったところに、凧子の言っていた駄菓子屋はあった。木造の店舗には所狭しとお菓子が置いてあって、隅の方にお菓子の山に埋もれるようにちよこんと店番のおばさんが座っている。

「おばあちゃん、こんにちは！」

凧子は店の脇に自転車を止めてから真つ先にそのおばあさんの所に挨拶をしに行った。俺もそれに倣っておばあさんに軽く頭を下げる。

「まあ、まあ。こんにちは、凧子ちゃん。お友達かしら？」

おばあさんは俺たちの顔をそれぞれ確かめるように見つめた後、口元をゆるめて、ゆっくりとした口調でそう言った。

「そうだよ、新しいお友達。修一っていうの」

「あら、あら。よかったわねえ。新しいお友達、嬉しいでしょうねえ」

「うん、嬉しい！」

満面の笑みで凧子は嬉しいと言った。その笑顔を見ておばあさんも嬉しそうな顔をする。俺はというとなんだかばつが悪くて、明後日の方を向いてしまった。

「そつえば、凧子ちゃん。今日は何の用事なんだい？」

「今日はね、修一とお菓子を買いに来たの！」

「まあ、まあ。そうなの、ありがとうねえ」

「どういたしまして！さて、修一。どのお菓子買う？」

「えっ。えーと」

いきなり話を振られて、俺はまごつきながらも慌てて手近にある棚を見た。

いかにも昔ながらというお菓子もあれば、最近のコンビニやスーパーでも普通に見かけるお菓子も揃っている。それらが同じ棚にきつ

ちり陳列されている様はまったくもってちぐはぐだ。

「修一、何買うか悩んでるの？」

「いや、別にそういうわけじゃないけど」

「じゃあなんですつと棚見てるの？早く買って食べよう」

「ああ、そうだな。うん」

俺は今度こそ真剣に買う菓子を選ぼうと棚を見る。ここは安全に味のわかってる定番のスナック菓子でいくか、それとも冒険して見たことない菓子を買うか。普段の俺なら確実に見たことない菓子を買っただろうが、だが今の俺は金欠だ。だから、貴重な小遣いを消費してまでまずいものを食いたくは無い。けれど、せっかくこんな駄菓子屋なんていういまどき珍しい場所に来て、味が保障されているからって、いつもと同じ菓子を買ってどうなんだろうか。

「ねー！まだー？」

「まだ」

「なんでさー！」

「なんでも」

俺が悩んでる隣で、凧子はいつの間にか選んでいた青いゼリーの入ったひょうたんみたいなのを握ってそわそわしていた。よほどはやくその菓子を食べたいらしい。そこまで考えて、俺はひらめいた。

「凧子、その手に持ってるやつ、そんなに美味しいのか？」

「え、そんなにつて？」

「だってさつきから俺の事やたら急かすだろ。早く食べたいんじゃないのか？」

凧子は何秒かきょとん、としたあと、ああ、と息を吐いた。

「そういうことか。うん、おいしいよ」

「どれくらい？」

俺の問いかけに、凧子はうんうん唸りながら、考えるそぶりを見せる。

「どれくらいって言われると困っちゃうけど……、このお店ではこれが一番好きかな」

この駄菓子屋の並み居る駄菓子のトップに立つなら、まあ外れて
ことはないだろう。いまだに難しい顔をしている風子に、俺は尋ね
た。

「それいくら」

「えーつと、50円だけど」

「じゃあ俺もそれにするわ。どこに置いてあるんだ」

「あっちの横冷蔵庫の中だよ」

横冷蔵庫と風子が指差した先には横になった冷蔵庫、ではなくコン
ビニなんかに置いてある上の蓋をスライドさせて空けるタイプの保
冷庫があつた。側面にプリントされている広告がかすれてほとんど
禿げている所をみると、この店と同じくかなりの年季の入つたもの
なんだろう。

俺は保冷庫の蓋をあけて、中から風子の持っているのと色違いのオ
レンジ色のゼリーを取り出す。手に取って見るとひんやりとして気
持ちが良い。風子の方を見ると、身振り手振りではやく買えとしき
りにアピールしてきていた。

「これ下さい」

ゼリーを差し出すと、おばあさんは老眼鏡をひょいと持ち上げて、
まじまじとゼリーを見る。そして一拍置いた後、ああ、そうだった
わ、とほほ笑む。

「これね、50円ですよ」

俺はポケットから軽い財布を出して50円玉を渡すと、風子も俺に
続いて10円玉五枚を差し出した。おばあさんはそれを笑顔で受け
取る。風子は愛想よくおばあさんに会釈を返すと、くるっ勢いよく
と俺の方を振り返った。

「よし、修一、食べよう!」

空よりもいくらか深いブルーハワイのゼリーを掲げながら、風子は
言った。

「え、今すぐ?」

「ここで!」

言うが早いか、凧子はあつという間にゼリーの口を切って、勢いよく吸い始めた。俺もそれに倣ってゼリーを食べ始める。やすっぱいがどこか懐かしい、オレンジの味がした。

自分のゼリーを半分くらい食べた後、凧子の手元を見るともう食べ終わっていた。カステラは残したのに、変な奴。そんなことを考えていると、俺の視線に気づいたのか凧子も俺の方を見た。

「あつ、まだ食べ終わってないの？」

「うん、まあ。せっかくだからゆっくり食べたいっていうかさ」

「駄目だよそんなんじゃない！これははやく食べた方がおいしいんだよ！」

大口を開けて凧子が力説する。齒列の間から真っ青になった舌が見えた。俺の舌も今はオレンジ色に染まっているのだろうか。

「はやくー、はやくー」

逆らうのも面倒なので、俺はしぶしぶ言われたとおりに残ったゼリーを飲み干す。最期の方は少しだけ味が濃くて、それがまたなんだか懐かしかった。

「これでいいか？」

空になった容器を見せつけるように凧子に見せたが、凧子はゼリー容器ではなく、俺の顔をじっと見つめていた。その視線はどこかこそばゆく、俺は咄嗟に目を逸らした。そんな俺をはやすことなく、

凧子は妙にゆっくり落ち着いた口調で俺に言った。

「修……どう？」

「どうって……甘かった、けど」

「そうじゃなくて、なんかこう……ないの？」

「いや、まあおいしかったけど」

そう言くと、凧子の眉はまるでマンガみたいなハの字型になり、目にはうつすらと涙が浮かんでいるように見えた。俺はそんな凧子の様子に動揺する。

「ど、どうしたんだよ、一体。なにが悲しいんだよ」

「だって、で、でも……」

凧子の瞳が細かく揺れている。

「俺さ、なんか悪いことでも言ったか？」

「……ううん」

凧子は力なく首を振って、下を向いた。

「具合でも悪くなったのか？」

そう聞いても、凧子はしばらく地面に視線を落したまま、しばらく黙っていた。俺はもうどうしていいかわからず、ただ凧子の頭に乗った帽子を見つめていた。

遠くの間から蝉の鳴き声が聞こえる、カラスの鳴く声も。あたりがオレンジ色に染まりはじめて、足元の影がずいぶん長くなっていることに気付いた。

「帰ろう」

凧子がぽつりと、つぶやいた。

一日目(5)

その後、俺と凧子と一緒にトンネルの所まで行った。トンネルまで辿りついたところには、もうずいぶん日も暮れて、あたりは紫色に薄暗かった。

トンネルの前まで来て、俺を先導していた凧子が不意に脇にそれて、自転車を降りた。俺も一旦自転車を止める。

「ここまでで、いいかな？」

「うん、あとは来た道だからわかる」

「そつか。じゃあ、ここまででいいね」

凧子が俺に薄く笑う。俺もそれにきこちなく笑い返す。

「それじゃ」

短く言って、俺はそのまま自転車を漕いで行ってしまうとする。けれど、凧子が俺の服の端をつかんでいるのに気づいて、止めた。

「修一」

「なんだよ」

「今日はごめんね」

震える声で、凧子は呟いた。小さな声だったが、その声は微かな潮騒にまぎれることなく、しっかりと俺の耳に届いた。俺は凧子のほうに向き直して、我ながらぶっきらぼうに答えた。

「何、あやまつてるんだよ」

「最後、だまつちゃってて、楽しくなかったでしょ」

確かに、駄菓子屋から家に帰ってここに至るまで、凧子はあまり喋らなかった。気まずい思いをしなかったといったら嘘になるけれど、別に特別嫌だったわけじゃない。

「そんなの、別にいいよ」

「許してくれるの？」

そもそも怒っていないのだから、許すも許さないもないと思ったが、俺はとりあえず頷いておくことにした。

「じゃあ、明日も遊びに来てくれる？お祭りがあるの、人も、明日はいっぱい居るよ」

「別に、暇だからいいけど」

「ほんと？」

俺はもう一度力強く頷いた。

「じゃあ、今日修一が来たくらいの時間に、私ここで待ってるから」

「わかった」

「ありがとう」

薄く微笑んで、凧子は俺の服から手を離す。

「またね、ばいばい、修一」

俺は再び、自転車を漕ぎ出す。真っ暗なトンネルに向かう俺の背中を、たぶん凧子は、ずっと見つめていた。

二日目(1)

次の日は、日差しが強くて蒸し暑い日だった。

風もほとんど吹かないので、俺は午前中のほとんどを扇風機の前で過ごした。じいちゃんはその俺をだらしないと叱ったが、何を言われても頑として動かない俺を見て、午後は必ず外へ出るんだぞと言いつ残して何処かへ行ってしまった。その言いつけは守れそうだった。なぜなら今日も風子と会う約束をしているのだから。

風子。

昨日、風子と別れてから、駄菓子屋の前で見た風子の悲しそうな顔ばかりが頭に浮かんた。なぜ風子は突然あんな顔をしたのだろうか。全く思い当たる節はなかった。だって、勧めてもらった菓子を食べて、それを美味しいと言つて、その何が悪かったのだろうか。普通に考えて、何も悪いことなんてないじゃないか。

それなら、きつと風子には何か普通でない事情があるに違いない。それでは、その普通じゃない事情とは何なのだろうか。そうだ、例えば俺と風子は幼い頃会つていて、あのゼリーは思い出のお菓子なのかもしれない。小さい頃遊んだ記憶を思い出して欲しくて、それで風子は俺をあのだ菓子屋に連れて行って、ゼリーを食べさせるように仕組んだ、とか。

「そんな馬鹿な」

扇風機の前で冷やし中華を頬張りながら、俺は自分に突っ込んだ。まさかそんなことがあるわけがない。トンネルの向こうへ行つたのは初めてだろう。いや、でも元々ここらへんに住んであつちに引越したとか。いやいや、そもそも俺に幼馴染が居たなんて記憶はないし、会ったことがあつたとしてどうしてストリートに言わないのか。

「俺ってこつちに幼馴染いたっけ？」

扇風機のほうを向いたまま、テレビを見ながら俺と同じように冷やし中華を食べている母さんに問いかける。母さんはうーんと一つ唸って、答えた。

「いないと思うけど。いても自分で覚えてるんじゃない？」

だって里帰りし始めたのって、あんたが小学生にあがってからでしょ」

「そうなんだよな……」

「なんでいきなりそんなこと聞くのよ？」

「それは……」

俺は凧子の事を説明しようとして、やめた。トンネルの向こうで女の子に会って、それでその子が悲しそうな顔をした理由が知りたくて、なんて。そんな事をわざわざ母さんに説明する気にはならなかったからだ。

「別に」

「別についてなに。気になるじゃない」

母さんはテレビから視線をそらさずに言った。全然気になっているように見えない。

「いや、なんか暇だからさ。幼馴染でもいれば暇つぶせるのにつて」

「そうね、この辺には昔からあんたと同じくらいの子いないからね」

「そうなんだよな……。自転車にも飽きてきたし」

「へえ、でもどうせ、今日も自転車でどっかいくんでしょ」

「まあね」

そう返すと、母さんはあ、と大げさにため息をついた。少年が夏休みに太陽の下で運動することの、どこにため息をつく要素があるというのか。

「やっぱり。怪我だけはしないようにね」

「はいはい」

ふと時計を見ると、だいたい昨日家を出た時間になっていた。皿に中途半端に残った冷やし中華を汁ごと一気にかきこんで、それをさつさと飲み下す。

「そろそろ出るの？」

「うん、まあ」

「いつてらっしゃい。食器は流しに下げなさいよ」

「わかってる」

扇風機の涼しさに後ろ髪を引かれながら、俺は立ち上がり流しへ向った。

二日目(2)

そして俺はまた、あのトンネルの前に来ていた。辺りには誰も居ない。木々のざわめく音と、蝉の鳴き声だけが聞こえてくる。そんな中で、トンネルは昨日と全く変わらない佇まいで俺を待っていた。ぽっかりと大きな黒い口を開けるそのトンネルに、俺はためらいなく吸い込まれていく。

トンネルの中は相変わらず真っ暗で、自転車のフロントライトは今日も意味を成していない。外は昨日にも増して暑苦しいほど明るいのに、トンネルの中はひんやりと暗い。その様子に若干の違和感を覚えつつも、俺は立ちこぎでトンネルの中を進んでいく。塗りつぶされたように黒い空間の中、自転車をこぎ続けていくらかの時間が経つと、やはり向こう側に小さく明かりが見えた。俺はその光にむかって、自転車を加速させる。

光がある程度の大きさになったころ、光の中に一つの人影があることに気づいた。あの肩幅の広いシルエットは、たぶん男のものだろうと思う。更に近づいてくと、その人物は白いワイシャツを着ていることがわかった。白いワイシャツが印象的な人物を、俺は一人知っている。まさか、と思いながら俺はだんだんと近づくその人物の顔を目を凝らして確認した。

信彦だった。

こちらがあちらに気づいたのほとんど同時に、信彦も俺に気づいたようで、軽く手を振られた俺はそれを受けて、信彦の前で自転車を止めた。

「おい、ちび」

不名誉な呼びかけにカチンと来て顔がこわばるが、ここでくっつかっても仕方ないので、俺はと。

「なんか用ですか」

「お前さ、凧子と約束してここに来たんだろ」

相変わらず人の話を聞かない奴だ。俺はせめてもの反抗として露骨に顔をしかめた。

「……そうすけど」

「これ食つとけ」

信彦はそう言つて、俺にまたキャラメルを一粒だけ差し出した。大きな手に一粒だけ乗っかっているキャラメルはしてどこかシュールだ。

「えっ、なんで……」

「いいから食え、早く。凧子が来ないうちに」

俺は少しだけためらったが、信彦の視線が痛いので、昨日と同じようにがしがし奥歯でキャラメルを噛んで、さつさと食べてしまった。「食べましたけど」

「それでいい。……それと、お前は明日もここへ来るのか？」

「いや別に、決めてませんけど」

信彦はそこで一旦床に目を落としてから、ふたたび俺の方を向いた。信彦のこのトンネルみたいに真黒な瞳が、俺を見据える。

「明日ここに俺はいない。正確には今日の夜から明日の夜までだ」

「はあ……」

「明日ここに来るのなら、何かを食べながら来い」

「食べながら？」

「キャラメルでも、なんでも。必ずだ」

妙に真剣そうな信彦に押されて、ついつい俺はひとつ頷いてしまう。けれど、信彦はどうしてそんなことを言うのだろうか。そう聞こうとしたところで、信彦は俺に背を向けてトンネルの向こう、つまり俺が今来た方へ行ってしまう。俺は慌てて信彦の背中に叫んだ。

「何でそんなことしなくちゃいけないんですか！」

トンネルの中で俺の声と足音が何度も木霊する。けれど、信彦からの返事は聞こえてこない。

「ちゃんと説明して行けよ！」

今度はもつと大声で言ってみたが、やっぱり返事はない。それどころかトンネルの闇に飲みこまれて、信彦の姿さえもう見えなくなってしまった。俺はそれでも諦めきれずにしばらくトンネルの中を走って追いかけた。けれど、いくら追いかけてもついに信彦に追いつくことは出来なかった。

「なんなんだよ……」

荒い息のなか、ひとつ呟いて深呼吸をする。すると頭のすうつと芯が冷えてきて、そして俺は唐突に風子との約束を思い出した。またあそこまで戻らなくちゃいけないのかよ、徒歩で。ああ、こんなことなら自転車で追いかければよかったんだ、というか元から自転車で追いかけていれば簡単に信彦に追いつけたんじゃないだろうか。いや、そんなこといまさら後悔したって仕方ない。俺は信彦を追っていた時とはうってかわって、のっそりと気だるく歩きだした。

自転車のところまで戻ると、そこには風子がいた。相変わらず白いワンピースに白い帽子をかぶっている。トンネルの壁に寄り掛かってぼーっとしていた風子は、俺の方に気づくと嬉しそうに近寄ってきた。

「修一、どうしたの？そんなに汗かいて、しかも自転車ここに置きっぱなしだし」

「信彦さんを追っててさ」

信彦の名前を聞いて、風子は少しだけ眉をしかめた。

「信ちゃん？ 会ったの？」

「うん、そうなんだよちょうどこのトンネル抜けたところだよ」

「あ、そっか。信ちゃん里帰り今日からだもんなあ」

里帰りか、なるほど。この住宅地から外へ出るってことは、里帰りか、買い物かくらいだもんな。……いや、でも待てよ。

「……歩いて？」

「そりゃ歩くでしょ？」

いや、歩くのはまずいだろ。どのくらいの長さがあるかは正確に分

からないけれど、このトンネルは歩いて抜けるとすればそこその時間がかるはずだ。しかも、トンネルを歩いて抜けたとしても、トンネルから人が住んでいる所まで結構な距離があると思うのだけれど……。

「トンネルから近いのか？ 信彦の実家」

「わかんない。そんなことより修一、お祭り行こう！」

「ちょ、ちょっと」

「きつとびっくりするよ、町が賑やかで！ いっぱいお菓子食べようね！」

妙にはしゃいだ様子の凧子は自転車に乗って、振り返って笑う。俺もそれにつられるようにして笑う。そうだ、今日はお祭りなんだ。信彦のことなんか忘れて、思いっきり楽しもう。そんな気持ちをペダルに乗せて、俺は勢いよく漕ぎだした。

二日目(3)

祭りの会場は凧子の家からほど近いところにある小さな神社だった。境内からずらつと露店が立ち並んでいて、その上には無数の提灯が吊るされていて、まさに日本の夏祭りという感じた。しかも、凧子から聞いていた通りに、昨日の町の様子からは考えられない程の人がひしめき合っていて、すごくにぎやかだった。そんな中を、俺は凧子にひっぱられながら、あっちへこっちへ夢中で見て回った。手持ちの小遣いが少ないせいで、ほとんどが見物だけになってしまったのが悔やまれるけれど……。それでも、いろんな屋台を見て回るのは本当に楽しかった。

「あ、修一、わたあめ！おっきいね！」

「ホントだ、でかい……」

凧子の指差した先には、軒先にぶら下がったたくさんの綿菓子があった。ひとつひとつが俺の頭よりふた回りくらい大きい。

「食べよう！一緒に食べよう！」

ぴんと延びた凧子の人差し指が、上機嫌にピンク色の綿菓子を指していた。

「いいけど、でもいくらか見てからでいいか？」

「二百円だから、ひとり百円だよ」

「あの大きさで二百円か……よし。行くぞ、凧子！」

「おー！」

俺と凧子は人波をかき分けて、屋台の前まで行く。するとガタイのいい鉢巻をまいたおっさんが威勢よく声をかけてきた。

「おう、いらっしやい！」

野太い声色に少しだけ圧倒されたが、俺もそれに負けじと、祭りの賑やかしさに負けない様に叫ぶように返した。

「綿あめください！」

「はいよ、二百円だね」

俺が財布の中の十円玉を数えていると、遅れていた風子がやっと人ごみの中から屋台の前に競り出てくる。するとおっさんは少々芝居がかった様子で、おおっ、と大げさに風子の登場に反応して見せた。どうやら風子の知り合いらしい。

「こりゃあ、風子ちゃんじゃないか。いらっしやい！」

「おじさん、こんばんは！」

風子の高い声は祭りの雑踏のなかで、何故だかよく通った。

「綿あめかい？」

「そうだけど、この男の子と一緒に食べるから」

「おい、じゃあまさか坊主、風子ちゃんの彼氏なのかい？」

やっと百円分の十円玉を数え終わったところに話題を振られて反射的に固まってしまった俺を傍目に、風子は笑ってあっさり違つよと返す。そこまでさりと流されてしまうのも少しさびしいかもしれない。

「でも、大事な友達なの。ほら、修一お金渡して」

「あ、これ百円分です」

「私も、はい」

「はいはい、毎度！それじゃ風子ちゃん、坊主、楽しんでいきなよ！」

「はいーい！」

風子は満面の笑顔でおじさんに返事をする。俺も軽く会釈をして、その場から立ち去った。

「それじゃ、修一だいたい出店も回ったし、そろそろ時間だから花火見に行こう！」

「えっ、でもまだ綿あめしか買ってないけど、いいのか？」

「まあ確かにちょっと寂しい気もするけど、でも修一お金ないんでしょ？」

俺はぐっと言葉に詰まった。小銭だらけの財布が憎らしくて恥ずかしくて、ポケットの中で握りつぶす。まあ夏休み調子に乗って散在したのは俺の責任なんだけれど。

「べ、べつにないことないけど」

「えー、でも昨日駄菓子屋さんですっごく値段気にしてたじゃない」
「あ、あれは」

「かくさないでいいよ。それに私、今日ちゃんと他に食べるもの用意してきたもん」

「食べるもの？」

「食べるものを用意してきたと凧子は言うが、凧子は何にも持っていない。ポケットに財布は入っているようだったが、どういことなのだろうか。」

「神社の境内の奥にね、すごい花火が綺麗に見られる場所があって、場所取りのついでに置いてきたの」

なるほど、そういうことか。心の中で俺は勝手に納得する。

「ね、だからはやく行こう！」

「そうだな」

差し出された凧子の手をとって、俺たちは境内へと走り出す。お祭りの色とりどりの賑やかな景色がつつぎに脇を通り過ぎて行った。まるで万華鏡のなかにいるみたいだね、と言った凧子の横顔が提灯に照らされて、キラキラと輝いて見えた。

二日目(4)

凧子が場所取りをした場所は、境内の奥も奥。境内の裏の茂みの中にあるほとんどけもの道のようなところを通った所にあつた。蚊に食われながら、草で切り傷を作りながらやつとたどり着いた場所は、なるほど、それだけの価値のある場所だと思つた。そこは境内よりもすこし高い丘のような場所で、この町と海が一望できる場所だつた。遠くの祭り会場の明かりが、まるで地上の星のように光っている。空に浮かぶ本物の星も、紺色の空に無数に浮かんで、見事の一言だつた。

「綺麗でしょ？」

凧子が俺に問いかける。

「ああ」

俺は凧子の問いかけに、視線をその景色からそらせないまま返した。黙つて景色に圧倒されている俺を、凧子はおかしそうにくすくす笑つていた。

「そんなに珍しいかなあ、この景色。まだ花火も上つてないのに、そんなにみとれちゃつてさ」

「珍しいっていうかさ、綺麗じゃん」

「そっか。ずっと当たり前前にある景色だったから、そんなに意識したことがなかったかも」

「なにそれ、もったいねー」

「そうだね、もったいないね。さあさあ、修一、いつまでも突っ立つてないで、シート敷くの手伝つて。もうへとへと！」

場所取りの為にその辺に置いてあつたのだらうビニールシートを手渡ししながら、凧子はそう言う。確かに今日はずつとはしゃぎっぱなしだったから、言われてみれば俺も疲れているかもしれない。意識すると急に立っていることがだるく感じてきて、俺はさつさとビニールシートをひいて座ってしまった。凧子も俺がビニールシートを

ひき終わつたのを見ると、大きなバスケットを抱えて俺の横に座つた。

「凧子、なんだそのでかいの」

「これ？これはね、カステラと麦茶の入った水筒だよ」

「あー、これが綿あめの他に食べるものか。っていうかまたカステラと麦茶かよ」

「持ってきてもらってるのに、文句言わないの」

「そうだけどさあ」

「おいしいからいいでしょ？修一昨日すごいおいしそうに食べてたじゃん」

「まあ、確かに……」

確かに、昨日のカステラは美味かった。卵黄の風味が濃厚で……いや、それ以前にめちやくちゃ腹減ってたしな。麦茶も喉が渴いてたのもあつて最高に美味かった。そしてそれは今も同じだから、きつと今日も凧子のカステラと麦茶は美味いに違いない。

「さつさと食おう」

「あ、待つて！カステラよりも綿あめ先に食べた方がいいんじゃない？しぼんじやうよ」

「そういえばそうだな」

俺は手に持っていた綿あめをあらためて掲げてみる。確かにさつきよりしぼんでいる気がする。俺は綿あめのフィルムを剥いで、豪快にかぶりつく。べっ甲あめより少しだけ甘いような絶妙な味が口に広がる。

「うまい！」

「ちよつと、修一ばかりずるい！私も食べる！」

「わかつたわかつた、ほら」

綿あめを差し出すと、凧子は俺の手から奪うようにして綿あめを手にとった。そしてすぐに綿あめにかぶりつく。

「あまーい！」

「当然だろ」

「うまい！」

「だよな」

口々にほめちぎりながら夢中になって食べると、凧子の頭より大きかった綿あめはあつという間になくなってしまった。のこった棒つきれを名残惜しげに加える凧子は、なんだか満足気だった。

「ほんとにおいしかった！」

「あのおっさんプロだな」

「プロだねえ。でもさ、私は修一と食べられたからおいしかった！」
「えっ」

一瞬、固まる。

「修一もそうでしょ？誰かと一緒に食べるのって、おいしくて楽しいよね」

「あ、ああ。そうだな。そうだとさ。さあ、次はカステラも食べよう」

「修一はホント、食いしん坊なんだから」

凧子は呆れた声色でそう言っ、わざとらしくため息をつきながら、バスケットを取り出した。ふたを開けると、そこには昨日と同じ厚く切られた黄色いカステラと、麦茶が入っているだろう水筒と、カステラを食べるためのフォークがふたつ入っていた。

「はい、修一。カステラだよ」

凧子が差し出したカステラが乗った皿を、俺は受け取る。

「どうも」

「どういたしまして。この調子じゃ、花火が上がる前にカステラ食べ終わっちゃうかなあ」

さっそくカステラを頬張る俺を見て、凧子はクスクスと笑った。

「そういえば花火っていつ始まるんだよ」

「境内にあがってくるときはもうすぐだと思ったんだけどね、去年が今くらいだったから。でも今年はもう少し後になるみたい。ほら、あそこ見て。海辺の、テトラポットがたくさんある所の脇」

「テトラポット？」

聞き慣れない単語に、俺は首を傾げた。喉元まで出かかっているのだけれど、どうにも思い出せないの、正直に凧子に聞いてみる。

「テトラポットってなんだっけ」

「えー！修一、テトラポット知らないの？あれだよ、なんだっけ…」

えつと、しょ、消波ブロックのことだよ！」

「そっちの方がわからない」

「えつ、そう？えーっとねえ。白くて、足が四つの……とりあえずあれだよ！」

俺はすっかりしないまま、凧子の指差した方向を見る。遠くだから形まではしっかり見えなかったが、何か白いブロックみたいなものが無数に積まれているのが分かった。

「わかったような……わかんないような……」

「テトラポットはもういいよ。とにかく今は花火がいつ始まるのかって話だから！」

「あ、ああ。そうだったな」

「とにかくほら、あの白いブロックがいっぱい積んである横見て」

もう一度、テトラポットがある方向を見る。すると、そこには大きな筒がいくつか並べられていて、その周りに人が居た。

「あれ、打ち上げ花火の準備してるんだよ。今年は去年より遅いみたいだけど」

「ふーん、なるほどな」

筒の周りでちまちま動く人影を見ながら、俺はおもむろにカステラを口に運ぶ。やっぱりうまい。凧子もそれを見て、同じようにカステラを口に運んだ。しばらくお互いに無言でカステラを食べていたけれど、なんだかぜんぜん気まずくなかった。それは凧子も同じように、俺が凧子の方に黙って目配せをすると、凧子もいたずらっぽく笑って、俺の目配せに応えてきた。

「凧子さ、去年もここで花火見たのか？」

「うん、見たよ。毎年ここで見てるもん」

「去年は誰と見たんだよ」

「ひとりだよ」

「信彦は？」

「毎年この日、信ちゃんも里帰りなの」

「じゃあ、一昨年もひとりで見たのか？」

「……うん。まあ」

「寂しい奴」

わざと、意地の悪い感じで言ってみる。すると、凧子はそれを真に受けたようでむっと顔を険しくして、そっぽを向いてしまった。

「修一、感じ悪い！」

俺はその絵にかいたような拗ねたしぐさがおかしくて、声をたてて笑った。すると、凧子は恨みのこもった目でこちらを睨んでくる。

「だって仕方ないでしょ！この日はみんな、私くらいの子はみんな里帰りしたままなんだもん。帰ってくるのはおじさんおばさんばかり」

そういえばお祭り会場にいたのは、ある程度年齢の言った人ばかりだったかもしれない。やっぱりこの町に愛着のある年配の人じゃないと、わざわざ帰省中に町に一度帰ってくるなんてことはしないのかもしれない。

「まあ、それじゃ、仕方ないな」

「そう、仕方ないの」

「でもさ、今年はよかっただろ。俺が居たから」

凧子のはつとしたような、驚いたような顔をする。それからいつもみたいに元気いっぱいにはほ笑んで、大きくうなづいた。

「うん、うん。修一がいて、今年のお祭りはホントに楽しかったよ！」

まっすぐこちらを見ながら、あんまりいい笑顔でそんなことを言われたもので、俺はつい凧子から顔を逸らしてしまう。頬が少しだけあつい気がした。

「そりゃよかったな」

「うん、だからね、ず——」

そこで、大きな音を伴って、夜空に大きな花火が打ちあがった。俺と凧子は突然の事に驚いて、そろって空を見る。紺色の空に次々と打ち上がる花火は、もう見事の一言だった。

「綺麗だな」

「だね、修一。夜空に咲く、大輪の花だね」

「なんだよそれ、くさすぎだろ」

「あ、ひどーい！」

ひどいと言いながら、あからさまにポーズだけむくれてみせる凧子。そんな凧子がどうしてかおかしくて、楽しい。

「お前ってさ、面白いよな」

「そ、そう？そんなこと言われたことないけど……」

「いや、面白いよ」

「そ、そうかな。面白いかな」

大きな瞳を輝かせながら、凧子は嬉しそうにはにかむ。

「面白って言われて嬉しいがるって、変な奴だな」

「だってさ、それって一緒にいたら楽しいってことでしょ？」

「まあ……うん」

「それってすごい嬉しいことだと思うから」

「そ、そっか」

凧子のこういうストレートさというか、幼いからこそその純粹さが、俺はやっぱり苦手だった。でも、俺も小学生のころはそうだったかもしれない。素敵なものを素敵と言って、嬉しかったら素直に嬉しがって。その時その時の感情をそのまま表に出して今よりずっと気楽に生きていたような、そんな気がする。凧子も、そうなのだろうか。

「凧子さ」

「え？」

「凧子はさ、嬉しいとかさ、結構ストレートに言うよな」

「うん、言うよ」

凧子はさも当たり前のことのように、俺の期待した答えを返した。
しかし凧子はでも、と続ける。

「でも、お父さんとお母さんの前ではそれが上手くできないんだ」
そう言った凧子は表情を少しだけ固くしたけれど、それでも笑顔は崩さなかった。

「私ね、今はお父さんとお母さんと、別々に住んでるの」

そういえば、信彦がそんなことを言っていた気がする。凧子の両親は今居ないから、自分が面倒を見ているのだと。

「えーっと、仕事とかの関係で？」

「まあ、そんなかんじ」

「大変だなあ」

「うっん、別に。信ちゃんもいるし。でもね、やっぱりたまに寂しくなるんだ」

凧子は大きな瞳に花火を映しながら、とつとつと語りだす。花火の打ち上げはまだ終わる気配を見せず、海岸の方から絶えず鈍い音とパラパラと火の子の爆ぜる音が聞こえてくる。

「でも言えない、そんな事言ったら迷惑かけちゃうから。だからその分、普段は嬉しいとか寂しいとか、はつきり言いたいのかな。普段はそんな意識とかしてるわけじゃないけど、改めて考えたらそうかもなつて。ごめんね、こんなどうでもいい話しちゃって」

誤魔化すように凧子が笑う。俺はそんな凧子に、なんて声を掛ければいいのか分からなかった。俺は小さいころから父さんも母さんもずっとそばにいて、夏休みにはじいちゃんとはあちゃんにも会えてこんな俺が、今凧子にかけられる言葉ってあるのだろうか。あるのだとしたら、どんな言葉をかければいいのか。俺は考えて、考えた末に、こう言った。

「心配すんな。凧子みたいないい奴を、凧子の父さんも母さんもほっとかないって。だから、そのうちまた一緒に暮らせるよ。きつと」
凧子はきよとした表情をした後、今日見た中で一番の笑顔で言った。

「
ありがとう、
修一
」

二日目(5)

俺たちはその後も他愛のない会話をしながら、最後まで花火をみていた。花火が終わると、二人であたりを軽く片づけてから帰ることにした。自転車は凧子の家に停めてきたので、凧子の家までは一緒に歩いてくことになる。暗い夜道を二人で怪談を話しながら帰ったのは、最高に面白くて、ついつい回り道をしたりもした。

しかし、そんな楽しい時間はあつという間に過ぎてしまい、とうとう凧子の家に到着してしまった。

「着いちゃったね」

「うん、じゃあ、またな」

「あつ」

凧子が呼びとめるような格好をしたので、俺は自転車にまたがろうとするのをやめた。

「なんだよ」

「あつ、えーつと……あの……」

凧子は明後日の方向を向いて、もじもじと考えるようなしぐさをする。何を考えているのだろうか。

「早くしろよ。いいかげんにしないとホント母さんに怒られるし」

「いや、えつと、えーつと。……あ、そうだ！ 麦茶！」

「麦茶？」

「バスケットの中に麦茶用意してたでしょ。せっかくだから飲んで！」

「はあ……まあ、いいけど」

凧子は素早い動作でバスケットから大きな水筒を持ちだし、水筒のふたに麦茶をそそいで、俺に差し出す。俺はそれを、時間もないので一気に飲み干した。凧子かというと、その様子をなんだか妙に真剣に観察していた。

「どうも、うまかった。じゃあな」

「えっ」

俺はそれだけ言って、さっさと自転車にまたがって走りだしてしまった。そんな俺の背中に、凧子の声が浴びせられる。

「修一！明日も、明日も遊べるよねー？」

俺は片手でガッツポーズを作って、凧子にサインを送った。

「じゃあまた、また明日、おんなじくらいの時間にね！絶対来てね！」

凧子の大声が住宅街に木霊する。ちらと後ろを振り返ってみると、凧子は両手を必死そうにぶんぶんと俺に向けて振っていた。俺は凧子のそんな姿に噴き出しそうになったが、かわいそうなので我慢する。

明日も楽しい一日になりそうだ。

三日目(1)

次の日も俺はトンネルの向こうへ行こうと、昼飯を食べた後、自転車を出しに車庫へ向かった。外へ出ると、まず一番最初にどんよりと曇った灰色の空が目に入る。蒸し暑いほどだった昨日とはうってかわって、気温も半そでだと少し肌寒いくらいだった。もしかしたら傘でも持ってた方がいいかもしれないな、なんて考えながら車庫のシャッターを開けると、そこには軽トラの運転席でこっそり煙草を吹かすじいちゃんの姿があった。じいちゃんはこちらに気づくと、いつものようににんまりと笑って手を振ってくる。

「じいちゃん、禁煙してるんじゃないのか。ばあちゃんと母さんにどやされるぞ」

じいちゃんは元々相当なヘビースモーカーだったが、何年か前の検診の結果が思わしくなかったせいで、ここ数年半強制的に禁煙させられているのだ。

「ばれなきやいいんだよ、ばれなきや」

まったく悪びれる様子なく、じいちゃんは悠々と煙草を吹かし続ける。

「じゃあ今から言いに行くかな」

「お前なあ、そういうことやめろよ。煙草はなあ、男のロマンなんだよ、修一にだってわかるだろ？ たまーに、ちよつと吸うくらい良いじゃねえか、なあ」

ちよつとなんて言いながら、運転席の灰皿には何本もの吸い殻が入っているように見えた。遠くからだから詳しい本数は分からないが、ちよつとでないことはわかる。

「もう年なんだから、いい加減体大事にしるよ」

「体ねえ……煙草吸わない方がイカレちまう気がするけどなあ……」
紫煙を吐き出しながら、しみじみとじいちゃんが言う。

「気のせいだって、馬鹿じい」

「気のせいじゃねえよ。煙草は俺の石炭だ！」

じいちゃんはそので、何故か大声でカツカと笑った。どこが笑いどころか分からず、俺は首をかしげる。

「まあいいや、俺、もう行くわ」

「おつ、また自転車かあ？お前も飽きねえなあ」

「まあね」

「まさかコレか？」

右手の小指をたてて、いやらしい笑みを浮かべながらじいちゃんが言う。

「なにそれ」

「女ってことだよ」

「はあ？」

ついつい俺は大声を出してしまう。半分図星だったからだ。俺は今日も昨日も、凧子との約束のために毎日トンネルの向こうに通っている。けれど別に、凧子は女とかそういうわけじゃないし、俺もそういうのを意識して凧子と接しているわけではない。ただ、その事実が少しだけ恥ずかしいというのが、心のどこかにあった。

「ち、違うし」

「嘘つけ、で、どんな子なんだ？」

「だから、違うって」

「この辺だったら……桜子さんとかか？かーっ、お前ただけ熟女趣味なんだよ！まあ、桜子さんも五十年前はそうとう美人だったらしいけどなあ」

じいちゃんは勝手に盛り上がって、色々まくし立ててくる。こんな時のじいちゃんには何を言っても無駄なので、俺はさっさと出発してしまうことにした。

「違う！……もう行くから。あと、帰ってきたらばあちゃんと母さんに煙草の事報告するからな」

俺が自転車を車庫の奥から引っ張り出しながらそう言つと、じいちゃんはあからさまに慌てた様子を見せる。

「お、おいっ！待ってくれよ修一、じいちゃんが悪かった！な！」

じいちゃんの懇願を完全に無視して、俺は素知らぬ顔で自転車にまたがった。じいちゃんはそんな俺をみて、急いで煙草を灰皿になりつけて、軽トラから降りてきた。

「修一、な、頼む！頼むよ！お前も男だろ？」

「男とか関係ねーし」

「じゃあほら、これやるから！」

そう言っでじいちゃんは口のあいたガムを差し出した。じいちゃんがいっつも、煙草の代わりに噛んでいる、普通のガムだった。いない、と突っぱねようと思ったが、そこで俺は信彦の言葉を思い出した。確か、何か食べながら来いって言っていた気がする。今から家の中に何か取りに行くのは面倒だし、丁度いいかもしれない。そう思っで、俺はじいちゃんの手の上のガムをつかみ取っで、ポケットに突っ込んだ。

「わかった。今回だけだからな」

「すまねえな、修一！ありがとよ」

「じゃ、言ってくるわ」

そう言い残して、俺は自転車を走らせ始めた。じいちゃんは威勢よくいっでこい！と言っで俺を送り出してくれた。

相変わらず空は鈍色で冴えないけれど、きつと凧子といっしょなら、また楽しい時間が過ごせるだろう。そんな期待を胸に抱いて、俺と自転車はトンネルへ走る。

三日目(2)

トンネルの周辺は、天気が晴れだろうが曇りだろうが、雰囲気あまり変わりは無かった。あたりは不思議に静かで、その中で妙に存在感を持ったトンネルが、真つ黒な口をあけている。俺はその前で一度自転車を止めて、ポケットにしまいこんだガムを取り出して、一粒口に入れた。ありがちなミントのガムだったようで、口の中がスーッとする。信彦は、食べながら、と言っていた。それならガムを噛みながら、トンネルをくぐればいいはずだ。

俺は自転車のペダルに足をかけ直して、ガムを噛みしめながらトンネルの中に入って行った。暗いトンネルの中で自転車を漕ぎながら俺はどうして信彦の言うとおり、ガムなんて噛みながら自転車に乗っているんだろうかと考える。俺の中で信彦は嫌いな人間ではないが、正直良く分からないだけの人間だ。そんな奴の言う言葉を素直に聞いてしまっている自分に、多少の違和感を感じていた。確かに、信彦の言葉には妙な説得力というか、そういうものがある。あったよな、気がする。けれど、俺はそんな説得力とかあいまいなもので、言うことを聞いてしまう人間だっただろうか。

「そうかもな」

そうだ、きっと信彦が妙に偉そうだから、知らないうちにそういうものかと思いきや、こんでしまったのかもしれない、昨日は一日忙しかつたし。そうだ、そうに違いない。

そんなことをぐだぐだと考えているうちに、俺は結構な距離を進んでいたようで、いつの間にか出口がもうだいぶ近かった。出口には昨日のように人影があった。一瞬信彦か、とも思ったが、違った。今日のそのシルエットは信彦のものよりずっと小さくて、そしてなにやら帽子のようなものをかぶっているみたいだった。凧子だ、きっとそうに違いない。俺は慌ててその人影に向かって手を振った。すると、人影も俺に手を振り返してくる。昨日の帰りに見た、あの

おかしい振り方で。

風子がもう待っているとはっきりわかったので、俺はやく出口へ到達すべく、立ち漕ぎをはじめ。するとスピードがいつものようにぐんぐん上がり始め、出口の光と風子がどんどん近付いてくる。そしてほどなく、風子の所にたどりつけた。風子は今日もまた、同じような白いワンピースに白い帽子を被り、昨日カステラと水筒が入っていた、大きなバスケットを持っていた。

「おはよ、修一」

「こんにちはだろ」

「じゃあ、こんにちは、修一」

上機嫌そうに挨拶する風子につられて、俺の顔もついついゆるんでしまう。

「修一、今日はいっぱいお菓子持って来たんだ！」

「へー、そりやまたなんで」

「修一さ、昨日テトラポット知らないって言ってたでしょ？だから一緒に見に行こうかなって思って。それで、そこでお菓子でも食べたら楽しいかなって。修一っていつもお腹すいてるもんね」

「ここまで自転車ずつとこいできてるからなあ、腹も減るって。トンネルもやたら長いし。それにほら、俺成長期だから」

「成長期？」

風子はまじまじと俺の頭の上の方をみる。俺はわざとらしくないようにに胸を張って、少しだけ自分を大きく見せようと試みてみた。

「信ちゃんよりずっとちっちゃいけど？」

「うるせえ」

信彦と比べられては勝ち目は無い。だいたい、あんなデカいのはそうそういないと思う。ただ、風子にそうやって言い訳するのはなんだか格好がつかないので、黙っておくことにした。

「あ、そうだ修一」

「なんだ？」

「なにか、食べてないかな？」

そう言われて、ギクリとした俺は口の中にあつたガムを慌てて舌の裏に押し込んだ。吃驚した様子を悟られない様に、平静を装って言葉を返す。

「いいや」

「ほんとに？」

凧子は疑うような目でこちらを見上げてくる。丸い大きな瞳に見つめられ、俺は今更罪悪感を覚えた。どうして俺は、こんなくだらないことで嘘をついたのだろうか。別に凧子が恐ろしいとか、何か食べていたら怒られるとか、そんな事はないはずなのに。今からでも遅くないから、素直にガムを食べていると言ったほうがいいのだろうか。そう思つて口を開きかけたそのとき、凧子の方が先に喋り出した。

「よかったー。何か食べてきてたら、お菓子いっぱい持つてきちゃつたから困つたなつて思つてたんだ。ほんと、よかった！」

「あ、そ、そうなんだ」

「うん」

大げさなりアクションでほつとする凧子に、わざわざ水を差すことはできなかった。それに俺が今食べてるのはガム一粒だけだし、凧子が心配しているようにガムのせいで他の菓子が食べきれないということはないだろう。

「じゃあ、修一。行こうか！」

「テトラポットはここから遠いのか？」

「ううん、すぐ近くだよ。だから私も今日は自転車じゃないでしょ。それに、砂浜の上をちよつと歩かなくちゃいけないから、自転車はどうせ置いてかなきゃいけないし」

「ああ、そつか。じゃあ、自転車は置いて言つた方がいいな。どこに置けばいいかな」

「この辺においちゃえば？車も人も、どうせ通らないし」

「そうだな」

俺はトンネルの出口のすぐそばの、ガードレールの横に自転車を停めた。万が一に備えて、一応ガードレールと車輪にチェーンを通して鍵をかけておく。

「それじゃあ行こうか、修一」

そう言った凧子は、当たり前のように手を差し出して来る。そして俺も、その手をなんのためらいもなく取る。

空はトンネルの向こうもあいにくの曇り空だったが、海は不思議に青く輝いていた。そんな海のそばを、俺と凧子は海辺のテトラポットを目指して、笑いあいながら歩いて行った。

三日目(3)

最初に凧子と出会った場所とは反対側に五分ほど歩くと、変わった形の白いブロックが表れた。四足、というか一つの足に三つの足が生えているというかんじの、なんとも形容しがたい形のそれが、テトラポットというらしい。それが果てしなく乱雑にいくつもいくつも積み上げられていた。

「はじめてみたの？」

「うん、まあ」

「不思議な形だね、これ。それに、思ったよりおっきかったでしょ？」

「そうだな」

凧子の言うとおり、境内の奥の茂みから見るときは、もっと小さいサイズを想像していた。けれど実際には俺の身長よりずっと大きくて、多分二メートル以上はあるんじゃないだろうか。その白さと大きさは、どこか信彦を連想させた。いや、さすがにあいつだって二メートルは無い気がするけど。

テトラポットを見ながらぼーっとそんな事を考えていた俺のシャツを、凧子がひっぱった。俺はそれに反応して、凧子を見た。凧子の顔はさっきと同様に明るく、とても機嫌がよさそうだ。

「さて、修一、登ろう！」

「は？」

さも当然そうに、笑顔で言った凧子に俺はとっさにそうとしか答えられなかった。

「だから、登ろう！」

「え、危なくないのか？なんか隙間いっぱいあるし……」

「もー、大丈夫だって。修一は怖がりだなー」

「怖がってないし。ただ凧子が心配なだけだし」

「はいはい」

生返事をしながら、凧子はワンピースのすそをひるがえしながらさつさとテトラポットの上によじ登ってしまう。ここ数日遊んで気心が知れているとはいえ、年下の女の子にそう侮られて良い気はしない。俺は、戸惑いながらもテトラポットを登り始めた。足をかける所の少ないため、最初こそ戸惑ったが、結局は凹凸の大きい形なので俺は難なくテトラポットの頂上に登ることができた。どうだ！そんな気持ちで凧子が居るはずの方向を見ると、凧子はテトラポットの海を渡り歩いて、遠くの方まで行ってしまっていた。

「おーそーい！」

小馬鹿にしたような声色で、凧子がはやす。俺は大人げなく頭に血を登らせて、凧子のあとを追うべく、一步踏み出した。けれど、なかなかうまく凧子のところまでいけない。テトラポットたちはランダムに積み上げられていて、真っ直ぐになっている足場が極端に少なかったからだ。だから多少斜めになっている足場も利用しなければならぬのだが、テトラポットの表面はつるつるしているの、そういう足場を使う時は慎重に行かなければならなかったのだ。しかも、テトラポットとテトラポットの間にできる深い穴が、俺の歩みを必要以上に慎重にさせていた。万が一あんなところに落ちたら、怪我なしでは済まないだろう。

それでもなんとかコツをつかみながら、結構な時間をかけて、俺は凧子の所まで到着することができた。ただ、喜ぶ気力もないほど、心も体もげっそりと疲れてしまっていたが。

「修一、お疲れ！」

元氣そうに微笑む凧子の笑顔が、今回ばかりはたまらなく憎らしい。

「疲れたよ、もう、ホントに」

「もう、今からそんなんじゃない、帰るときもつと大変だよ？」

「帰り道……」

帰り道の事を思っ、俺はさらに落ち込んだ。あといくらかしたら、俺はまたこんな罰ゲームみたいなことさせられるのか、と。本気で落ち込む俺を見て、凧子は慌てた様子でフォローし始める。

「あ、で、でもさ！もし辛かったら私がおんぶして帰るよ！」

「いいよ、凧子。俺、大丈夫だよ……」

「そ、そう？」

「ああ……」

本当なら軽口のひとつやふたつ言つて、凧子を安心させればいいんだろ？が、ひきつった笑いを浮かべながら申し訳程度に大丈夫だといふくらいしか、今の俺にはできなかった。本当に情けないっらない。

「あ、そうだ！修一、お菓子、お菓子食べよう！」

「お菓子、ああ、そうだな」

凧子は立っていたテトラポットに何のためらいもなく腰をかける。俺もそれに倣つて、おそろおそろなるべく平らなテトラポットに乗り移つてから、座つた。

「お菓子食べれば元気出るつて！」

凧子はいそいそと大きなバスケットを開けて、中から色々な駄菓子をとり出して、自分の膝に並べていく。というか、凧子はどうしてあんな大きなものを持つて、あんな不安定な足場を歩けるんだろうか、本当に不思議で仕方がない。

「ほら修一、どれがいい？」

広げた駄菓子を示して、凧子が俺に言う。そこには思ったよりもいろんな種類の駄菓子があった。定番のスナック菓子やら、嘘ヨーグルトやら、この前の駄菓子屋で買ったのか、感じさせる年代はばらばらだった。俺はとりあえず目に付いた、小袋に入つたラムネを手取る。

「これ、いいか？」

「うん、どうぞ。じゃあ私は……これかな」

凧子も自分の菓子を選んで、そしてさつさと食べ始めてしまった。

「ほら、修一もはやく食べなよ、全部食べちゃうよ」

「わかつたわかつた」

切れ込みから袋を破つて、中身のラムネを取り出し、口に含む。適

当に口の中で小さくしてから、あとはもう飲みこんでしまった。さて、次の駄菓子は何にしようか。ああ、そうだあのパチパチするあめでも食べよう。そう思ってた手を伸ばした時、胃の中に妙な違和感を覚えた。だるいような、重いような。気のせいだろうか。

「なあ、風子」

「なあに？」

「このお菓子さ、実はずー古いとかない？」

「えっなんで?! そんなことないよ!」

「いや、なんか昔っぽいのか結構あるし」

「それはほらー、あの駄菓子屋さんで買ったからだよ」

「だよな、まさか傷んでるとか、そんなことないよな……」

「大丈夫だよ! 絶対!」

せつかく俺の為に、お菓子を用意してくれた風子に、ちょっと胃の調子が悪くなっただけでこれ以上色々言う気にはなれず、俺はその違和感を無視して、次のお菓子を手にすることにした。いかにも昔風のお菓子ではなく、最近のコンビニでも売っているようなものを探す。すると最近流行のアニメキャラクターが印刷されたマシマ口が目に入った。これなら間違っても傷んでいないだろう。しかし、そのマシマ口を飲みこんだ次の瞬間、激しい嘔吐感が俺を襲った。あまりに気持ちが悪いので、何度も何度もえずいてしまった。

「修一! ちょっとねえ、大丈夫?」

心配してくれる風子の呼びかけに、俺はこみ上げる不快感のあまり応えることが出来なかった。

「これ、飲みなよ。きっと気分が良くなるよ」

そんな俺に、風子は本当に、本当に心配そうに俺に口のあいた水筒を差し出す。ほのかなはずの麦茶の香りが、何故か強烈に鼻につく。それがただただ怖くて、俺はしぐさで麦茶を拒んだ。

「どうして?」

眉間をわずかに寄せて、眉尻を下げて、不思議そうな顔をする風子。

「飲みなよ、楽になれるよ、きつと」

諭すようなやさしい声色で、凧子は俺にそう言う。そう言って、白くて細くて小さい手で持った水筒を、健気に俺に勧める。

「い、いらない……」

「わがままいわないで、苦しいんでしょ」

「飲みたくない」

「なんで？」

「だって、それ、匂いが」

「匂い？なんにも変なにおいしないよ。飲みなつて、ねえ」

体のパーツそれぞれが、どんどんだるくなってくる。座っているのも辛いくらいに、頭も肩も腕も何もかもがずっしりと重い。頭の中も鈍くなってきたている気がする。俺はたまらずにこうべを垂れた。

「飲みたくない」

「なんで」

「やだ」

「修……」

俺は項垂れていたので、凧子の表情を見ることはできなかった。けれど、彼女の表情はたぶん、悲しそうなものに違いない。だって親切で差し出した麦茶の匂いが気に入らないと、断られたんだから。「飲んで」

口のすぐそばに水筒を押しつけられて、それでも俺は素直にそれを飲むとは思えなかった。麦茶の香りからどうにか逃れようと顔をそむければ、凧子は無言でまた、俺の口元に水筒を押し付けるのだった。そんなことをしている間にも、どんどん具合が悪くなる。内臓が体の中でぐるぐるうごめく感じがする、冷や汗が体中から噴き出す感じがする。口がばさばさに乾いて、変な味がする。そして俺は、舌の裏に隠していた食べかけのガムの存在を思い出した。

こんな時にガムの事なんか思い出してどうするんだ。そうも思ったが、そもそもこのガムは何で食べてきたんだっけ。そうだ、信彦に言われて、わざわざ噛んできたガムじゃないか。キャラメルでも、

なんでも、食べながら来いとあいつは言った。ガムを食べながら……食べる？

そうだ。食べたらいいいんだ。ガムを飲みこめば、いいんだ。俺はのろのろ動く舌を動かし、隠れたガムを引っ張り出してそして、飲みこむ。ガムが喉を通り、それはやがて胃に達した、気がした。

するとどうだろうか、さっきまでの気持ちの悪さがどんどんなくなっていく。体は嘘のように軽くなって、頭もすっきりと冴えてきた。頭がはつきりしてくると、俺を心配して麦茶を差し出してくれていた風子の事が気になりだした。いつのまにか麦茶の香りも気にならなくなっていたので、俺は目の前にあった水筒をやっと受け取り、それをぐいぐいと飲んだ。

「風子、ごめん。あと、麦茶うまかったから、ありがとう」

顔を上げながら、俺は風子にそう言った。そこに、ほっとした顔の風子が居ることを期待して。けれど実際そこにいたのは、瞳いっぱい涙を浮かべた風子だった。

「いま、何か食べたでしょ」

「え、ああ、噛んでたガムが口の中にずっとあったんだけど、なんか飲んじやって……」

「ガム、飲んだの？」

「えっと、うん」

「麦茶を、飲む前に？」

「だから、そうだけど」

俺がそう言つと、風子はとうとう泣きだしてしまった。

「な、風子どうしたんだよ？」

俺は慌てて声をかけたが、風子は首を振るだけで何も答えない。ただ、嗚咽をこらえずに泣きじゃくるのだった。風子の膝に広げられた駄菓子たちが、ぼろぼろとテトラポットの隙間に落ちていく。

「風子、駄菓子が……」

「いいの！そんなの、もう……意味無いんだから！」

意味無いんだから。風子のその言葉が奇妙に俺の頭の中で、何度も

何度も反響した。

「それってどういう……」

その言葉の真意を知りたくて、確かめたくて、俺は風子の震える小さな肩に触れる。いや、触れようとした。風子が俺の手を強く振り払ったので、触れられなかったのだ。

「どう、して」

あまりの風子の態度の豹変ぶりに戸惑いを隠せなかった。ひきつった喉で、なんとか風子にそう問う。すると風子はすっと両掌を俺に向けて、その手でためらいなく、俺の体を突き飛ばした。

不安定なテトラポットの上で、傾く俺の体。自分の力じゃ、もう戻れない。俺の体は、俺の意思とは関係なくテトラポットの隙間の奈落へと吸い込まれていく。曇った空、テトラポットの丸まった角、お菓子の入ったバスケット、そして、風子。そのすべてがゆっくりと遠ざかっていく。

どんどん遠ざかる景色の中、風子の口が動くのが見えた。けれど何を言っているか、俺の耳には届いてこなかった。

「みつつ、たべたのに」

「おともだちに、なれるって、ずっといっしょだって……」

「どうして、……」

景色は豆粒のように小さくなり、やがて消え、世界は真っ暗になる。黒く塗りつぶされた世界、この場所を俺は知っていた。どこだっただろうか、ここは、どこだっただろうか。

頭が重い。さっきのような不快な重さではない。眠りに落ちる直前の、心地よい気だるさが、俺の頭を支配しつつあった。ここがどこなのか、風子はどうなったのか、なんだったのか、知リたかったが、頭が考えること自体を拒否する。

ゆるやかなまどろみのなか、俺は瞼を閉じて、眠った。

三日目(4)

「修一、修一」

誰かが俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。いったい誰だろうか。

「ちよつと、修一！」

今度は体を揺さぶられながら、また名前を呼ばれた。そこで俺は気づく。ああ、この声は母さんの声だ。俺はそつと目を開いた。するとそこには、案の定母さんの顔があつた。

「修一、もう心配させて！今何時だと思ってるの？」

母さんにそう言われてあたりを目だけで見回すと、もうどこもかしこも紺色に染まって、すっかり日が暮れてしまっているようだった。

「……夜？」

「馬鹿！夜は夜でも、もう九時すぎよ！」

「えっ！」

九時、その言葉があんまりにも予想外すぎて、俺は飛び起きた。改めてあたりを見回してみると、そこは例のトンネルの前だった。トンネルの前にはライトをつけたままの母さんの軽自動車と、トンネルの先に鍵をつけて置いてきたはずの俺の自転車があつた。

「こんなところで、こんな時間まで何してたの？」

「何って……」

何をしてたのか、改めて問われて、俺は思い出す。凧子とテトラポットを見に行ったこと、一緒にお菓子を食べたこと、そして……そして、凧子が俺を突き落としたこと。それからどうやってここまで帰って来たのかは、記憶がすっぱり抜け落ちたように、全く思い出す事ができない。

「……忘れた」

「忘れた？！忘れたって、どういうことなの？」

「いやだから、トンネルの向こうに抜けて、それで……忘れた」

凧子の事はあえて言及せず、母さんにざっくりと説明する。母さん

はそんな俺の説明を聞いて、盛大にため息をついた。どうやら納得できなかったらしい。

「嘘言わないの」

「本当だって」

「いいから、正直に本当の事をいいなさい」

「なんで嘘って決めつけるんだよ」

「だって、トンネルは途中でふさがってるじゃない」

「は？」

それはいったいどういうことだろうか。もう何度も、俺はこのトンネルを通っているはずなのに、それが、塞がっている？ どういうことか理解できず、俺はトンネルの中に飛び込んだ。トンネルの中は、外の夜闇よりも暗かった。その中を俺は無心になって駆けた。しかし何十メートルか走ったところで、大きな石のようなものに突き当たった。暗闇の中目をこらしてみると、その大きな石はいくつもあって、確かにトンネルをふさいでいるようだった。けれど、俺はこんな石の壁を知らない。こんなもの、少なくとも今日の午前まではなかったはずだ。動揺する俺はとりあえず、とぼとぼと母さんの所まで戻ってくる。

「ほら、ふさがってたでしょ」

「……うん」

「で、本当は何してたの？」

「自転車、こいでた。このへんぐるぐる」

俺はトンネルの向こうに行っていたというのをやめた。トンネルがふさがっている以上、今までの事を母さんになんと説明すればいいのか、分からなかったからだ。それに、トンネルの先が無かったら無かったで、それはそれでいいんじゃないだろうか、という気持ちが俺にはあった。情けないことに、俺は風子に突き落とされたのが相当ショックだったらしい。

「そう、やっぱり。それで、どうしてここに倒れてたの？」

「それで、ええと……」

俺は必死で考える。この辺をぐるぐる自転車で回っていた俺は、どうして倒れてしまったのだろうか。けれど、そんな理由なんて何も思いつかなかった。そんな俺に、母さんはやれやれという様子で何かを差し出した。手のひらサイズの、古びた紙でできた箱だった。印刷がかなり劣化しているため、模様などはほとんどわからないが、かろうじてキャラメルと読めた。

「これ、あんたの自転車のかごに入ってたんだけど」

「それで？」

「それでじゃないわよ、拾い食いしたんでしょ？それで、具合悪くなつて倒れたと」

「はあ？」

違う、とついつい否定しそうになったが、俺は口をつぐむ。ここで否定すると、倒れた別の理由を考えなくてはいけなくなる。母さんがその理由で納得してくれているならば、多少不名誉でも、そのままにしておくのがいいだろう。

「……ふたつだけ、食べた」

「もう、ほんと馬鹿なんだから。こんな古そうなお菓子食べたら駄目だつて、中二にもなつて考えられないの？」

「ごめんなさい」

「まったくもう、どれだけ心配かけたかわかつてる？」

「わかつてます、ほんとうにごめんなさい」

素直に反省をするポーズをとると、母さんはひとまず満足してくれたように、俺に車に乗るよう促した。俺は自転車をトランクに積んで、助手席に乗り込む。俺が乗ったのを確認してから、既に運転席に座っていた母さんはさっそくエンジンをかけて、車を走らせた。古ぼけたトンネルが自転車よりもずっと速い速度で遠ざかっていき、あっという間に小さくなっていった。複雑な胸の内を抱えながら俺はその様子をずっと、ぎりぎりまで眺めていた。

そして、ついに出発の日。俺は母さんの軽自動車に乗って、真っ直ぐに伸びる道路をひたすらに走っていた。窓の外を見ると、まだ青い水田が無限に広がっていた。もう一時間以上同じような景色を見ている。

「母さん、あと何時間くらいでつく？」

「そうねー、あと四時間くらいかしらね」

「うわ、まじかよ」

まだ何時間もこんな狭い中でじっとしていなくちゃいけないのかと思うと、本当に気が滅入ってきた。箱の中に入って走るなんて、どうかしている。こんな窮屈な思いをするくらいなら、いつそ自転車で実家まで帰りたいとすら思ってしまう。

自転車。その言葉がきっかけとなって、急にあのトンネルの向こうでの思い出が浮かんできた。凧子と信彦に出会ったこと、駄菓子屋に行ったこと、お祭りに行ったこと、そして、海辺のテトラポットを見に行ったこと。ここ三日間の思い出は、すべて幻か何かだったのだろうか。そんなこと信じられないと思う気持ちと、そうかもしれないと認める気持ちとが、俺の中にあった。

凧子。凧子はどうして、最後に俺を突き落としたのだろうか。いや、それ以前にどうして泣いたりなんかしたんだろうか。凧子の真意を知る術は、俺には多分もう無い。けれど考えずにはいられなかった。たった数日間とはいえ、楽しく遊んだ友達だったのだから。

俺は車窓から真っ青に晴れた空を見て、テトラポットの上から見た海の青さを思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1613t/>

海辺のテトラポット

2011年10月9日02時27分発行